

越水破堤を防ぐ堤防補強の検討を!

細川 ゆう子

下記は、地元の町会報に寄せた福井県の災害現場視察の報告書です。拙い文章ですが、現場を見たときのショックを精一杯伝えようとしたものです。編集者の意向で、地元が危険な地域だと強調する言い方は避け、地域の防災力を高めることを訴えたものになっていますが、一番伝えなかったのは、越水破堤を防ぐ堤防補強の工法を考えるべきだということでした。猪名川部会では、環境としての堤防のあり方を主張してきた私ですが、福井の災害現場に立ち、越水の恐ろしさに考えを改めざるを得ませんでした。

それにしても、現在河川管理者から提示されている工法には、まったく不満です。是非、さらなる検討をお願いします。

「福井県の災害現場を訪れる機会を得ました。想定外の降雨による水害でしたが、二種類の大災害が同時に起こっていました。

ひとつは、上流の土石流災害。一番深刻な被害を受けた地域は、ダム建設が反対運動により計画変更され、新たな建設予定地の下流でした。そのため、ダム建設の推進を望む声も強まっているようです。けれど、今回の災害は、川の背後の山の沢という沢から大量の土砂が流れ込み、とても、ダムで防げるものではありませんでした。一階の窓に丸太が突き刺さる光景のすさまじさには、圧倒されました。

もうひとつは、下流の堤防破堤による浸水被害です。足羽川は、福井県の管轄で、猪名川より小さな川ですが、上流のあちこちで堤防を越えた水が水田に流れ込み、線路をねじ曲げ、それでも足りず下流に一気に下ったのです。下流はかなり広くなり、猪名川と風景も似ていました。26箇所堤防を越えて水があふれ始めて、わずか3、40分で、堤防が破堤したそうです。恐ろしいのは、破堤箇所が素人が見ても危険だという条件を備えていたことです。蛇行した流れの曲がり角に当たっていたこと、対岸の運動公園のため、高水敷が広げられ人工的な狭窄部になっていたこと、すぐ下流に水門と橋と鉄橋があり、橋脚に流木などが引っかかり水をせき止めたこと、しかも、その上流の対岸側に県庁や城跡などがあるため、水防活動はそちらに集中し、破堤箇所は手薄になっていました。

私は、生まれたときから川の直下に住んでいながら、堤防が破堤するような洪水を経験したことはありません。目の前の立派な堤防が、洪水から必ず守ってくれると思い込んでいました。それが、淀川水系流域委員会の委員として河川整備計画の策定にかかわるようになり、堤防は、決して安全なものではなく、ダムは、洪水に対して万能ではないということを学びました。今回の視察で、堤防のコンクリート護岸が、それを越える洪水にあって、その背後から削られ、倒れたり壊れたりした姿を見ました。また、堤防を乗り越えた水が急激に堤防をえぐっていました。水が堤防を越えたところは、川の側の草が青々と残っているのに、住宅側は土がむき出しになるのです。福井の破堤した堤防の高さは、4メートル。猪名川、藻川に囲まれた、ここ島の内の堤防の高さは、その2倍です。島の内のどこかで破堤した場合、4丁目、5丁目より南の浸水予想は、2メートルから5メートルです。そのため、新しい河川整備計画では、ボーリング調査を行い、緊急を要する場所を選定し、堤防の強化を進めることが決まっています。

福井の災害では、地域住民の協力により、災害の大きさにもかかわらず、それで生命を失う人がありませんでした。日ごろの地域の連携あってこそ、快挙といえます。今、この町が福井のような災害に見舞われたら、寝たきりのお年寄りや、障害のある方を助けて、全員無事に避難することができるでしょうか。どんなに優れた技術も、完全に災害から守ってはくれません。私たちが福井の災害から学ぶべきことは、いたずらに恐れることなく、日ごろから、みんなが住みやすい地域づくりに力を合わせることでないでしょうか。」